

05・頑張った日の、あまあま褒め合いラブラブキス（イラストの仕事が無事終わったので）

とある年の春。四月二十二日、金曜日。二十二時半ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。室温は二十四度。

外から七緒が帰ってくるので、あったかめになっている。

場所は、七緒の自宅。

主人公は今、七緒がアルバイトから帰るのを待ちながら、居間のテーブル前に座っている。

本日は毎週恒例、桐生家にお泊まりの日。

遅くまで仕事で戻らない七緒の母親の代わりに、主人公が掃除洗濯、料理をして。

アルバイトで疲れて帰ってくる七緒に、お風呂とご飯、そして自分を用意して待機する日である。

〈主人公〉

「ふああ……疲れたあ……」

主人公、ひとりごちると、ベタッと上半身をテーブルに倒し、窓際の物干しに掛けた洗濯物たちを眺める。

しかし、その言葉とは裏腹に、心はキラキラと充実感に満ちている。
お嫁さんっぽい事が出来たからである。

これまで洗濯など『かつたるい』『億劫だ』と思っていた。

だが、それが七緒のものとなると、一気にやる気が出るから不思議だ。
洗濯だけではない。家事全部、いや、どんな事でもだ。

自分が頑張れば頑張った分だけ、七緒の負担は軽くなり、笑顔は増える。
そう思えば、どんな事もできる気がしてくるのだ。

〈主人公〉

「えへ……えへへへ……」

なー、早く帰ってこないかなあ……♡」

主人公、ヘラヘラと不気味に笑うと、頬杖をついてうつとりと七緒を想う。
すでに準備は万端。

夕飯には七緒の好きな鳥団子鍋も作ったし、今日はデザートにバナナパンディングまで焼いた。

鍋はともかく、プディングまであるのは少々カロリー過多な気がしないでもないが、まあいい。

とにかく主人公は『今日も無事に家事を終え、未来のなーのお嫁さんとして役に立てている』という幸福感に酔いしれているのだった。

なお、先ほどの洗濯物の中には、主人公のものもある。

それは、昨日、なんとか替えて帰る事を許してもらえた下着とか……。

以前七緒が『これ、どうしても先輩に着てほしくて……♥』と言ってプレゼントしてくれた、アライグマの絵が描かれたスウェットの上下などである。

そのスウェットには、怖い顔をしたアライグマの頭部を描いたイラストと『洗熊注意』の文字が書かれており、主に主人公がこの家で過ごす時に着ている。

だが、なぜか七緒も当然のように着るため、今は洗濯されているのだった。

七緒は主人公の服を着て寝るのが好きだし、主人公に自分の服を着せるのも好きなのである。

だから厳密には、ここに干してある服はすべて主人公の服でもある。と言ってよかった。ゆえに、最初からそれを想定して買われたスウェットは七緒サイズだ。

もう少し暖かくなれば、元々オーバーサイズ気味の主人公は、下を穿かせてもらえず、

落ち着かなくてもじもじするさまを鑑賞されたり、露出した足を触られまくるいたずらに遭ったりする事だろう。

だがそれもまた、主人公にとっては楽しみの一つでしかない。
なので、

……まあ、いいけどね。

わたし、なーのそういう、隙あらばエロい事してくるところ大好きだし……
ていうか、今日はちよつと遅めだな。♥

買い物もしてきてるのかな？

それなら、ちよつと落書きでもするか。

絵文字はもう、PCじゃないと作業できないからな……。

と、ニヤニヤしながらノートに絵を描き始めると……。

SE1 主人公が紙にイラストを描く音

【最初から最後まで流す】

【0―5秒ほど流してSE2】

【その後、SE2と重ねて流し、SE1が先にストップする】

SE2 玄関の扉が開錠される音

【最初から最後まで流す】

【少し遠くで聞こえる】

【SE1と重ねて流す】

七緒が帰ってきた！

〈主人公〉

「！」

主人公、すぐさま気づいて描く手を止めると、立ち上がり……パタパタと玄関に向かって駆けていく。

SE3 玄関の扉が開く音

【最初から最後まで流す】

【少し遠くで聞こえる】

SE 4 主人公が玄関に向かつて歩く足音

【最初から最後まで流す】

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

● 正面 30センチ

「【少し疲労感はあるつつも、嬉しそうに。

アルバイトで疲れているが、今夜は主人公が待っていてくれるので】

はあ……！ ただいま戻りました♡」

SE 5 主人公が玄関に向かう足音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「お帰り！」

主人公、駆け寄ると、そのまま両手を広げて七緒の胸に飛び込む。

七緒もまた、同じように手を広げて主人公を受け止め、そのまま抱きしめてくれる。

●正面 30センチ

「少し疲労感はあるつつも、嬉しそうに。

アルバイトで疲れているが、今夜は主人公が待っていてくれるので」
ただいまです♥

〈主人公〉

「お疲れ様！ 今日一杯頑張ったな！

ご飯もお風呂もできてるぞ♥」

主人公、たつぷりとねぎらいの言葉をかけつつ、ぎゅーっと七緒を抱きしめ返す。
帰宅したばかりの身体は冷たく、外の匂いとする。

だから主人公は、ますます『わたしがあつたためねば』という使命感に駆られ……それから心の中で『お風呂もご飯も完璧だけど、ついでにわたしも用意できてるからな。どうぞ遠慮なく、わたしからいっちゃっても、いいんだぞ……♥』と付け加える。

これまで何度も『わたし』からいたただかれている関係なのだから、その程度の事、さらっと口にしてしまえばいい。

だが主人公には、未だに少々照れがあるのだった。

SE 6 七緒と主人公が抱き合う音

【最初から最後まで流す】

七緒、近づき、すんすんと主人公の匂いをかぐ。

●正面 10センチ

「【※3回※】 ゆっくり、深く、大きく呼吸する。

主人公に抱きついて、その匂いを鼻一杯に吸い込んで、堪能している。

七緒は主人公の匂いが大好きで、主人公限定匂いフェチなので」

すうう……っ……♡

はあ……。

すうっ……♡

「うっとりとしため息をつく。

『帰宅すると、主人公が食事やお風呂を用意して待っていてくれる』というシチュエーションが、あまりにも夢のようなので」

はあ♡

帰ったら先輩居るのやばく……♡

【※3回※ ゆっくり、深く、大きく呼吸する。

先ほどよりは浅く、静かにかぐ。

主人公の匂いを嗅いで、うっとりしている】

すうう……はー……すー……♡

【とても嬉しそうに。

主人公の匂いを思いっきり吸い込んで】

んー……♡

【とても嬉しそうに。

主人公の体温や抱き心地を堪能している】

はあ……めっちゃ気持ちいい……先輩あったかい……♡

七緒、顔を近づけてキスする。

● 正面 0センチ

【※1回※ キスする。唇に、軽く音を立ててキスする】

ちゅ♡

〈主人公〉

「」

主人公、当然のようにキスされ、これを自然に受け入れつつも、心臓は途端に跳ね出す。

七緒はたった今、主人公の匂いを喜んでかき『気持ちいい』と言ってくれた。

だが、そんなの主人公だって同じなのだ。

七緒はいつでもいい匂いで、こうやって密着しているととても気持ちがよくて。

主人公は、いつもうっとりして。同時にすぐドキドキしてしまう……。

……そんな事を思っていると、七緒が、会話するために少しだけ離れた。

●正面 3センチ

「うっとり実感を含めて。」

帰宅すると主人公がいて、たくさん甘えられる状況がとても幸せなので」

何（なん）か。こうやって甘えられるのっていいですね

すごいホツとします……」

七緒、再び顔を近づけてキスする。

●正面 0センチ

「※1回※ キスする。唇に、軽く音を立ててキスする」

ちゅ♡

「きやつきやと嬉しそうに。

『好き』が『しゅき』になる」

もう、先輩好き♡ 大しゅき♡

「※3回※ キスする。額、鼻、唇に、軽く音を立ててキスする」

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅっ♡」

〈主人公〉

「……♡♡」

……ああ。

ダメだよ。ダメだよ、なー……♡

いきなりこんな甘いやつされたら、わたし、もっとしたくなっちゃうよ。
このままじゃ、えっちな事しか考えられなくなって。

疲れてお腹空かせてるなーに、エロい事おねだりしちゃうよ……♡

主人公、出迎えるなりこうしてキスの雨を降らされ、すっかりめろめろになりかける。
しかし、

● 正面 3センチ

「嬉しそうに。少し甘えた声でたずねる。

主人公が用意してくれている夕食を楽しみに帰ってきたので」

ねえ♥

今日ご飯何（なに）作ってくれたんですか？」

と言われた事で、

〈主人公〉

「ハッ！」

と理性を取り戻した。

そうだ。

今日の主人公は、七緒においしいご飯を食べてもらうために頑張って料理したのだ。
自分もいただいてほしい所だが、ご飯も自慢したい状況なのである。

〈主人公〉

「……むっふっふ。なーよ。よくぞ聞いてくれました」

なので主人公は、むふんと得意げに鼻をこすった。

それは、数秒前までとろとろになっていた人とは思えない変わり身ぶりだが、今日は自信作なので仕方ない。

〈主人公〉

「聞いて驚け。」

今日はな。なーの好きな鶏団子鍋だぞ！」

二人、会話するために、少し距離が離れる。

● 正面 15センチ

「声が弾む。とても嬉しそうに。」

大好物が今夜のメニューだと聞いたので。

鶏団子鍋に使う鶏団子は、春になるにつれて店頭での扱いが減り、手に入りにくくなる。

なので、今日のメニューとして出た事に、少し驚いてもいる」
えっ♡ほんと？」

主人公、七緒を見上げると、今日の献立を告げる。

〈主人公〉

「うん！ 鶏団子、春になったら売らなくなるって聞いててビビってたけど。案外まだ置いてあるもんだな。まだ寒いからかな？

後な？ デザートもあるんだ！

なーがまた食べたいって言うてくれた、バナナのパンプディングだぞ。

って言うても、今日は遅いから。明日にでも食べてくれれば……」

●正面 15センチ

「【声が弾む。ますますテンションが上がる。

バナナパンプディングもまた、先日自分が『食べたい』とリクエストしたものの一つだったのだ。

それから、たとえどんなメニューであろうと、主人公が作ってくれた時点で『全部食べる』という選択肢しかないのだ」

えー！ 食べますー！ 全部食べます！

もう全然。カロリーなんて気にしないですよ。

先輩。私が『お鍋食べたい』って言ったの、覚えててくれたんですね♡

【『好き』が『しゅき』になる】

もー♡ しゅきー♡ 先輩ほんとしゅきー♡」

〈主人公〉

「……もう。当たり前だろ♡ なーの言った事なんだからさ……♡
全部覚えてるに決まってるだろ♡」

主人公、またも鼻をこすり、悦に入る。

色々用意したはいいもの『気合入りすぎ』とか『そんなに食べられない』と言われたらどうしようかと、実は少し心配だった。

だが、七緒はそのような事を言う人間ではなかった。

不安でつい忘れかけていたが……主人公が七緒のためにした事は全部喜んでくれるし、失敗しても、いつも笑って受け入れてくれる。そういう女の子だった。

しかし、そんな七緒の反応に胸がときめき、

それなら、早速ご飯の準備を……いや、ここはやっぱり素直に『わたしを』と……。

と主人公がデレデレし始めたところで、七緒が新しい話題を振ってきた。

● 正面 3センチ

「ふと思いついて。」

アルバイト中もこの件が気になっており『帰ったら、早速尋ねよう』と思っていたのであ。そうだ。お仕事どうでした？

お返事来ました？」

〈主人公〉

「……あ！」

そうだ。忘れてた！

そういえば今日は、その件もあったわ。

主人公、これによって、己の仕事について思い出す。

そして早速、

〈主人公〉

「うん！ さっき無事に検収承認された！

後はお相手と最後にご挨拶して。

来月末にコミッションサイト経由でお金をもらったら終わりだよ」

と、事の顛末を伝える。

これは、今月頭から請け負っていたイラストについての話題だ。

とはいっても、主人公の作業はすでに終わっている。

だから今言った通り、後は依頼人が納品データをチェックし、そこで問題がなければ、お金を受け取って終わりだ。

それでも七緒は、色々と心配してくれていたらしい。

つくづくできた恋人である。

● 正面 15センチ

「『ばあっと明るく、嬉しそうに。』

この件について、少し心配していたので」

あ！ OK（オーケー）もらえたんですね！

「ちょっとコミカルに、大げさにねぎらう。

まるで、主人公が長期にわたる大仕事を終えたように言う」

よかったです。お疲れ様でした♥

「しみみと。

今回の依頼に関して、七緒も色々話を聞いていたので。

具体的には、依頼者が発注に慣れておらず、主人公はイメージをすり合わせるのに少々苦勞したので」

今回色々大変でしたもんね。

私もお話聞いてて『大丈夫なのかな』って心配でしたもん」

〈主人公〉

「あはは。その節は心配かけてごめんな。でも、これでおしまいだから！
今日はゆつくりできるぞ！」

主人公、

むむむ……確かに今回、最初ちょっとコミュニケーションがうまくいかなくて、なーに愚痴っちゃったもんなあ……。

心配かけちゃって、申し訳ない事したなあ。

いやでも、もう無事に済んだし！　これでなーを心配させる要素はないし！
その辺アピールしないと！

と思い、とりあえずびよんびよんと跳ねてみる。

すると、七緒が目を細めた。

まるで子どもを見る母親のような顔をされて、主人公はなんだか恥ずかしくなるが……
今夜ゆっくり過ごせるのを嬉しく思う気持ちは、七緒もまた同じようだった。

● 正面 15センチ

「ぱあっと明るく、嬉しそうに。」

今日は気兼ねなく過ごせるとわかり、とても嬉しいので」

はい♥ 今日はお互いお疲れ様って事で、沢山いちゃいちゃしましょうね♥

【少し間をあけてから。

うっとり。

最近の主人公はイラストの仕事も増え、とても『プロ』という感じがして格好いいので。
だが、主人公の自己評価はまだまだ低い。

オリジナルイラストの受注が主なのに『自分はアマチュア』『依頼があるのも、自分を紹

介してくれた有名人がいたり、自分が人気漫画の二次創作イラストを多数描いていたおかげだ』と思っているので。

しかし七緒はそれだけではないと思っており、その自己評価をもどかしく感じている。
なので、しっかり褒める」

はあ、何（なん）がかっこいいなあ♡

学生絵師って。

お仕事こんな順調に来てるんですから、

先輩、あつという間に有名になっちゃうかもですね♡」

〈主人公〉

「いやいや、それほどでもないって……♡

わたしと同じ年位でも、すごい活躍してる神絵師の人とか一杯いるし。

今のわたしは、主にむーちゃんと荒井ねねさんにめっちゃゲタ履かせてもらって、なんとか仕事もらえてるっていうか」

主人公、七緒の言葉にますます恥ずかしくなって、自分の指先同士をてれてれと合わせる。
る。

しかし、その仕草のまま、つんつんくつつけたり、離したりを繰り返していると。

七緒がふいに近寄り、不満げにこちらを覗き込んできた。

七緒、少し近づく。

● 正面 3センチ

「可愛く怒る。」

『ちよつと聞き捨てならない』という感じで。

『主人公は将来有望な作家である』事を、強めに念押ししたい。

主人公が自分自身を正しく評価していないので」

えく？

それほどでもありますっ。

【『すっごい』を強調して】

私、先輩は将来すっごい人気作家になるって思ってますから」

〈主人公〉

「そう……かな……？」

主人公、これによってさらに照れ、思わず目をそらしてしまう。

……嬉しい。

とても嬉しいのだが、不相応に評価されている気がして、返す言葉が見つからないのだ。
だが七緒は、そんな主人公を逃がすまいと両手を握りしめると、きっぱりとこう断言してくれた。

●正面 3センチ

「【きっぱりと同意して】

そう！

【可愛く断言する。

『将来主人公は、必ず有名作家になる』と言いたい』
なるの♡

先輩は絶対夢を叶えるし、私はそれをずっと応援しますから。

【可愛く、しかし強めに理解を促す。

主人公が自分自身を正しく評価していないので』
わかりました？」

〈主人公〉

「うん……♡」

——あ、やばい。ちよつと泣きそうかも。

今日はわたしが一杯なーを癒して励ますつもりだったのに、これじゃあ、わたしがそうされちゃってるよ……♡

主人公、温かい言葉に思わず涙ぐみ、目をこする。

七緒の言葉が、あまりにも嬉しかったからだ。

主人公は自分を『どこにでもいる、ちよつと絵を描くのが得意なだけの女の子』だと思っ
っている。

だけど七緒は主人公をそれ以上の存在として捉え、いつも、こんなにも応援してくれる。
そう思ったら……目の前がうるうるしてきてしまったのだ。

●正面 3センチ

「【にっこりと上機嫌で】

よろしい♡」

SE 7 七緒が主人公の肩を、ぽんと叩く音

【最初から最後まで流す】

七緒、にっこり笑顔になってぽんと主人公の両肩に手を置く。

それから『玄関で長話しすぎた』と感じ、そろそろ移動を促そうと、少し離れる。

● 正面 15センチ

「上機嫌で話題を変える。

あまり玄関で話し続けているのもなんなので、移動を促す」

そしたら、まずはご飯頂こつかなあ♡

私、先輩の作るご飯、だくい好き♡」

こうして、いよいよ食事が始まるかのように思えた。

しかし、七緒への感謝と感動で一杯の主人公も、ここで重要な事を思い出した。こちらからも一つ、七緒に聞いておきたい事があったのだ。

〈主人公〉

「……あ、そうだ！

なー。ごめん。わたしからも一つ聞きたい事が！」

●正面 15センチ

「きよとんとして。」

『一つ聞きたい事』について、心当たりがないので』

うん？

何（なん）ですか？」

〈主人公〉

「あ の さ。 来月の休みの件ってどうなった？」

主人公、ドキドキしながら尋ねる。

そう。主人公が現在こんなに必死にイラストの仕事をし、お金を貯めているのには、ある理由があった。

主人公には今、ものすごく行きたい場所があり、そこへ、ぜひ七緒を連れて行きたいのだ。

しかし、それを実現させるには、早い段階で七緒のスケジュールを押さえる必要がある。自分達のバックには由希乃がいる以上、心配ないとは思うが……予約の都合上、そろそろ日程を確定させておきたかったのだ。

●正面 15センチ

「【思い出して。

『私とした事が、そんなに大切な事を忘れていたとは』という感じで」

あ………♥

【すぐにテンションを上げ、上機嫌で。

七緒はまだ、この件の詳細を教えられていない。

『五月二十七日の創立記念日と、その次の日の二日間を一緒に過ごしたい。なので、アルバイトを休みにしておいてほしい』程度の事しか言われていない。

だが『主人公が自分のために、何かを計画してくれている』『イラストの仕事を非常に頑張っているのも、おそらくその計画と関係あるのだろう』という事は察している。

なので、主人公のその想いに、ぜひとも応えたいと思っている」

はい！ それもちやんと聞いてきましたよ♥

来月末、休み大丈夫です♥

創立記念日合わせで、連休いきます」

〈主人公〉

「ほんとにか!? よかったあ………♥」

●正面 15センチ

「ニコニコと上機嫌で。」

主人公が『ぱああっ……』と笑顔になったので、それが可愛らしく、嬉しいので」
はい♥ どうぞご安心下さい♥」

〈主人公〉

「ほんとだな!! 絶対だぞ!

後で何かあっても、その日のスケジュールだけは、絶対変えちゃダメだからな!ど、どうしてもダメになった時も。

それがわかった時点で、すぐにわたしに相談するんだぞ!」

主人公、喜びと安堵感で満たされつつも、もしもの事も考えて、必死で念を押す。

この計画には、七緒の休暇が必要不可欠だ。

また、もし万が一スケジュールが変更になった場合も、すぐにそれを教えてもらって、即対策を練らなくてはならないからだ。

しかし、ここまで言ってしまった時点で、もう『創立記念日と合わせた連休』で主人公が何をしようとしているのかは、七緒にはバレバレな気がするが……。

そのあたりは……。

いいのだ！

●正面 15センチ

「【にやにやと嬉しそうに。

この件について念押しされている、他の事項について述べる。

また、これらのオーダーからして『旅行に連れて行ってくれるのだろう』という事は察しがついているので」

うんうん♥ その日は一泊二日分の荷物持って♥

動きやすい格好で♥ 朝九時に先輩のお迎え待ってればいいんですね♥」

〈主人公〉

「そうだぞ！

あんまり歩きにくい靴とか、ヒラヒラしすぎた服はダメだ。

外を結構歩くのを想定して、対応しやすい格好で来てくれ。

それから、荷物の準備も忘れないでくれよな！

もちろんわたしも、なーが忘れ物してもいいようにしとくけど！」

●正面 15センチ

「【にやにやと嬉しそうに。

主人公のオーダーからして『旅行に連れて行ってくれるのだろうか』という事は察しがついているので」

ふふ♡

【ますますにやにと上機嫌で。

主人公の顔を覗き込んでたずねる】

何（なん）だろうなあ♡ 一体どこ連れてつてくれるんだろうなあ♡」

早口でまくし立てる主人公の顔を、七緒がにまにまと覗き込む。

バレている。行き先まではわからなくとも、主人公が何をしようとしているのか、七緒にはすでにバレている。

だが、ここでネタバラシする事だけはできない。

だから主人公は慌ててこぶしをぶんぶん上下に振ると、無理やり逃げ切る事にした。

〈主人公〉

「そ♡ それは！ 行ってみないとわかんねーなあ！

とにかく！ どんなに聞いたって、まだわかんないやつだからな！

今はもう。これ以上は喋らないぞ！」

●正面 15センチ

「きゃっきやと嬉しそうに。

慌てふためく主人公が可愛らしいので」

はい♡ 楽しみにしてます♡」

〈主人公〉

「よし！ じゃあ、すぐお鍋あっため直すからな！
なーは着替えてこいよ！」

●正面 30センチ

「きゃっきやと嬉しそうに」

はくい♡ じゃあご飯食べましょうか♡」

SE8 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

こうして主人公は逃げるようにリビングへ向かい、七緒は自室で着替えるため、一度別

れる。

そうなるはずだった。

● 正面 3センチ

「優しく、穏やかに」

あ。ごめんなさい。最後にもう一つだけ」

だが、主人公が廊下を歩き切ったところで……。
ふいに後ろから抱きつかれた。

SE9 七緒が後ろから抱きつく音

「最初から最後まで流す」

七緒、近づいて、後ろから左耳に話しかける。
声の方向が『正面』から『左』になる。

● 左 3センチ（背後から）

「優しく、真剣に。」

感謝の気持ちを込めて。

帰宅してこれまでの短い会話にも、主人公がいかに自分を想ってくれているかが伝わり、その愛情を実感したので。

同時に、昨日以前の出来事も振り返る。

七緒は、主人公が少しずつイラストの仕事を始めたり、熱心に料理に取り組んだり、親公認の関係を作り出したりしたのも、すべて自分との未来を見越してのものであると、わかっていくので。

なので、そこまで自分を想ってくれる主人公に対して、感謝の思いを伝える――

あのね。

いつも、ほんつとにありがとうございます。

スタンプや絵文字作るのも、イラストの受注も、お料理始められたのも。

ご両親に私の事紹介してくれて。

こうやって毎週泊まりに来てもらえる位。一緒に過ごしやすい環境にしてくれたのも……

全部。全部私の為だってわかっています」

〈主人公〉

「な……」

● 左 3センチ

「優しく真剣に」

今も、こうやって家（うち）に帰ってくるだけで。

『私は先輩に愛されてるんだ。大事にされてるんだ』って、すごい思います。

【涙ぐんで。

話しているうちに、気持ちが高ぶってしまったので】

ほんと、ありがとうございます。

大好きです。先輩。大好きです……♡」

七緒、顔を近づけてキスする。

主人公は、それを身じろぎもせず受け入れる。

● 正面 0センチ

「【※1回※ キスする。唇に、軽く音を立ててキスする】

ちゅ♡

【照れ笑いして。

一応確認は取りつつも、キスする気満々で】

へへ。キスしたくなっちゃった。
めっちゃしていいですか？」

〈主人公〉

「……」

もう、返事をする間ももったいなかった。

主人公は軽く背伸びをすると七緒の肩に手を置き、今度は自分からキスした。

● 正面 0センチ

「※1回※ キスされる。唇に、あまり音を立てずキスされる。
不意打ちで、少し驚く」
ん♡

「※3回※ キスする。唇に、軽く音を立ててキスする」
ちゅ♡♡♡ ちゅ♡♡♡ ちゅ♡♡♡

「※しばらく※ キスする。
舌を入れて、ラブラブなディープキス」
んっふ……あむ……ちゅっ♡

んっ♡ んっ♡ んー……♡
ちゅくっ……んれろっ……♡

【ここで唇を離す。

わざとらしく音を立てて離す】

ちゅぽっ♡

【※2回※ ゆっくり、興奮気味に呼吸する。

今のキスで、かなり気持ちが高まってきたので】

はあ、はあ。

【※1回※ ものすごくゆっくり、興奮気味に呼吸する。

今のキスで、かなり気持ちが高まってきたので】

ふー……♡「

目が合うと、七緒が泣きそうな顔で微笑んだ。

多分今、自分達が考えている事は同じだ。

主人公と七緒は今、もっと触れ合いたい、もっと一つになっていたいと思っている。

● 左 0センチ

「【少し甘えた声で、しつとりと】

あのね？ 先輩。

私、今すごいムラつときてます……
先輩と、すごいえっちしたいです」
♥

〈主人公〉

「わたしも……」

● 正面 0センチ

「【優しく、しつとりと】

先輩も？

【照れ笑いして。主人公と同じ気持ちでいる事が、とても嬉しいので
じゃあ。今日はめっちゃ甘いやつしたいですね……
そしたら、ご飯食べてお風呂入ったら」
♥

七緒、主人公の左耳にささやく。

声の方向が『正面』から『左』になる。

★ 左 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「甘々に、真剣に」

恋人同士のラブラブセックスしましよ……
♡
」 ※

ここでフェードアウトして終了。